



木 木

千葉県 TEACCH プログラム研究会
2018年12月16日(日) 第99号

「森」字・佐々木正美
イラスト・竹蓋伸六

発行：千葉県TEACCHプログラム研究会広報部
事務局：千葉県発達障害者支援センターCAS内 TEL 043-227-8557
ホームページ：<http://www5e.biglobe.ne.jp/~teacch/site17.htm>

平成30年度 第4回 連続セミナー（10月27日（土））

「自閉症スペクトラムの生涯支援」乳・幼児期から その子（人）、その個をいかして ～自信と自立、自尊感情を育む～

横浜市東部地域療育センター

心理 安倍陽子氏 通園 榊原舞氏



ASD（自閉スペクトラム症）とは、
○脳の生物学的な基盤によっておこる。
→生涯にわたる。育て方でおこるのではない。
○学習スタイルの「違い」を理解する。
→見方、感じ方、理解の仕方が違う。生活全般に影響。
⇒ *育て方や教育により、生きにくさが変わる

支援は一人ひとりに合わせて

- 知的水準 重度域の遅れ ↔ 優秀
- 多動な子ども ↔ おとなしい子ども
ADHD（多動性・不注意・衝動性）を伴う
- 器用な子ども ↔ 不器用な子ども
粗大運動・微細運動（身体障害や他の発達障害を伴う）
- ⇒ 予想・予測がつきにくい *思い込みは禁物
(ASDは特に一人ひとりが違う。)

□何を教えるか(What)＝カリキュラム

□どのように教えるのか(How)＝枠組み

「構造化」のアイデア・・・Structured TEACCHing

1 場所（空間） 2 スケジュール（時間）

3 ワーク/アクティビティシステム（活動）

4 視覚的構造化（指示・明瞭化・組織化）

何を教えていくか（個別の指導計画に向けて、必要な領域を整理する）

- 日常生活技能…身辺自立、家事、生活の管理など
- 学習技能…将来の職業につながる技能
- 学習行動、学習態度…将来職場で求められる行動
- コミュニケーション…必要な表出、理解
- 余暇技能/遊び…自由な時間の過ごし方など
- 社会性・対人行動…必要な対人行動
- 地域社会…地域での技能
- コーピングスキル…ストレスにどう対処するか
- 運動技能…粗大運動、巧緻運動
- 自己理解（認識）…感じ方、自分を理解する

基本的なお話を頂いた後、“特性にあった支援”を具体的に、事例をあげながら教えて下さいました。その中で、『理解の力は変動する』『分かることが大事』など大切なことを学ぶことができました。最後に、『成功経験は、子ども達にとっての成長の源』であることの重要性を改めて学びました。ありがとうございました。



お茶のみ話

現 千葉県TEACCHプログラム研究会代表
(元 県立特別支援学校 校長)

西村則子氏



20年以上前のことだが、日本でTEACCHを実践している学校を参観させていただいた。学校全体が集団より個人を優先している印象が、当時の私にとって衝撃的だった。中心に進めていらした先生の「TEACCHは予防教育よ。」との言葉が忘れられない。

その学校では、個に応じたスケジュールやワークシステムを取り入れることや表現のコミュニケーションを指導することは当然のように行われていたが、参観してぜひ実践していきたいと思ったことが二つあった。一つめは、調理実習であった。週に一回は調理実習が日課に位置づけられており、小学部の低学年では基本を学習し、高学年になると、自分で作りたい物の調理計画を立て、家庭学習として自分で材料を地域の店に買いに行き、翌日学校で調理をして昼食で食べ、残りを家庭に持って帰るといったものだった。その一連の活動には、将来の自立的生活に必要な様々な学習が含まれており、本人は達成感を感じ、家族にはほめられて満足感が得られるものであった。二つめは、地域の事業所での現場実習を中学部から行っているということだった。実習を行う際に、事前に教員が事業所に出向き、実習する生徒が学校で使っているスケジュールやワークシステムを使ってスムーズに作業が行えるように準備し、実際に実習を行っていくというものだった。事業所にも生徒を認めてもらえ、生徒も自信を持って作業に取り組めるものだった。

そのような実践を目指してきたが、残念ながら特別支援学校の現状はほとんど追いついていないと思う。調理学習はその後、0-157の問題で非常に厳しくなり、材料購入や作った食べ物の持ち帰りなどは制限された。上記のようにはできなくなってしまったが、学習の考え方は取り入れられる。実習での企業との連携も、障害者雇用が進んできたことで多少できるようになってきているが、まだまだ難しい。しかし、ごく一部であるがすばらしい実践もある。ある企業では障害者雇用を進めるために、担当者が特別支援学校を参観し、視覚支援や不器用な人でも取り組みやすいジグを作り、作業がスムーズに行えるようにしていた。その企業では、一般のパートの人でも作業効率が上がったとのことだった。また、別の企業では、担当者がその日のスケジュールを文字とイラストでメモしてくれたり、作業内容をわかりやすく絵で描いてくれたりしていた。福祉事業所も様々である。ある生活介護の福祉事業所で、担任が学校で使用している個別のスケジュールやコミュニケーションツールを説明したが受け入れてもらえず、予想通り生徒の不応行動がでてしまったことがあった。別の事業所では、生徒にあった作業が用意できないために不応行動が頻発してしまったことがあった。反対に、学校で行っている自立課題を持って行って実施し、その後施設でも自立課題を用意し、適応できたことがあった。学校でも、高等部になると生徒が集団でなんとなく動いてしまうので、個別にスケジュール等を提示することが減ってしまうが、福祉事業所から、「スケジュールはどうやって提示？ ワークシステムは？ コミュニケーションは？」と問われると、その必要性を再認識でき、学校でも再構造化できる。

20年以上前に参観した学校の実践は、「家庭生活・地域生活・社会生活に広げる・つなげる」という視点を大事にしたものであった。学校卒業後につなげるために、在学中から連携していくことは大事なことで、そのため両者からの働きかけが必要だと思う。同じ視点で、家庭・学校・卒業後の事業所が連携して行くために、TEACCHプログラム研究会のさまざまな研修を活かして欲しい。

平成30年度 TEACCHプログラム研究会 第6回連続セミナーのお知らせ

日時：平成31年2月24日（日） 13：30～16：30（受付13：00）

内容：家庭・学校・施設の実践報告

講師：保護者・教員・施設職員（予定）

会場：千葉県教育会館新館501会議室

（編集後記）私のTEACCHプログラムとの出会いは、西村則子先生でした。泣き叫ぶパニックの子供…どうしたら良いのだろうか？悩み考え…そして、環境の整理、スケジュールの提示、コミュニケーションのとり方を教えて頂きました。子供達の変容は言うまでもありません。あの時の子供達の目の輝き、自主的に行動する子供達が今でも忘れられません。これからも、あの時の気持ちを忘れず、支援し、そしてかかわっていきたく思います。（島尾）